

誇張表現として解釈される結果構文に関する一考察

－ 認知意味論のおよび語用論的観点に基づく分析 －

A Study on the Resultative Construction with Hyperbole Construal

－ An Analysis Based on the Cognitive Semantics and the Pragmatics －

新 妻 明 子

NIIZUMA Akiko

キーワード：結果構文、誇張表現、関連性理論、メトニミー

Keywords: The Resultative Constructions, Hyperbole, Relevance Theory, Metonymy

本論では、派生的結果構文の中でも誇張表現の解釈を持つ結果構文をはじめとする周辺的な結果構文の意味拡張と解釈について、語彙意味論による先行研究を踏まえ、認知意味論と語用論による分析を試みる。誇張表現として解釈される結果構文について、下位範疇化されていない疑似目的語は動作主とメトニミー関係にあり、結果事象が表す事象は動作主の行為の程度を表すことを提案する。また、解釈における曖昧性に関して、関連性理論に基づいて分析し、動作主の行為の程度を伝達する上で最適な関連性と文脈効果を期待する動機づけについて検討する。

1. はじめに

英語の結果構文には、派生的結果構文と呼ばれるタイプの構文があり、その中でも比喩的な誇張表現として解釈されるタイプの構文がある。

- (1) a. The king laughed himself sick.
b. The joggers ran the pavement thin.

(Napoli 1992: 79)

例えば(1a)の場合、「王様が笑いすぎたことによって本当に気分が悪くなった」というわけではなく、「それほどひどく笑った」という過度の行為として解釈される。同様に(2b)は、「走る」という行為が度をを超えてなされたことを示す。すなわち、舗装道路の厚みが実際に変化することを述べているのではなく、その上を人々が走ることで薄くなるような特性をその道路が持っている、ということの意味するわけでもない。そのため、次のようなパラフレーズ表現も容認されない。

- (2) a. #People can run that pavement thin easily because of an inherent quality of the pavement.

b. #That pavement runs thin easily.

(Goldberg 1995:253)

影山（2007）では、これらの結果構文は生産的な規則によって派生されるのではなく、VP 全体がひとまとまりのイディオムとして語彙化されていると指摘している。しかし、完全なイディオムというわけではなく、動詞の後ろの NP と結果述語が異なるが同様の意味を表す次の例を見てみよう。

(3) a. The joggers ran their Nikes threadbare. (Carrier and Randall 1992: 173)

b. The joggers ran themselves tired.

(1b)における VP が完全にイディオム化しているわけではなく、(3)のように生産性は限られるとはいえ異なる表現が複数あるのはどのようなメカニズムによるのだろうか。また、(3a)は比喩的な誇張表現として解釈されるものの、その解釈には曖昧性があり、字義的表現、近似表現、誇張法、隠喩のいずれともとることが可能であると考えられる。また(3b)は形式的には(1a)と同じだが、誇張表現というわけではない。

本論では、結果構文の中でも比喩的な誇張表現として解釈されるタイプの結果構文を、メトニミーの観点による認知意味論的知見と関連性理論に基づく語用論的知見から分析することを試みる。

2. 派生的結果構文に関する先行研究

2.1. 動詞のクオリア構造による下位分類

影山（1996）では、英語の結果構文を本来的結果構文と派生的結果構文の2つに分けており、動詞の意味に結果状態が含まれず、結果述語が変化結果を継ぎ足すような結果構文を「派生的結果構文」としている。さらに、影山（2005）ではレキシコン情報としてPustejovsky（1995）のクオリア構造の考えを取り入れた上で、主動詞から予測できる結果述語の辞書情報の範囲を明確にし、派生的結果構文を次のように下位分類している。

(4) 派生的結果構文の下位分類（影山 2005: 96）

(A) wipe clean タイプ

((4) a. John wiped the table clean.)

: 主動詞そのものの LCS は ACT(ON) であるが、目的役割に対象物の特定の変化結果を含む。結果述語は、その目的役割に示された変化結果に対応。

(B) shake awake タイプ

((4) b. Mary shook her son awake.)

: 主動詞は辞書表記として目的役割を含むが、その中身はひとつに特定されていない (underspecified) ので、慣習化の範囲内で様々な結果述語が可能。

<p>(C) bark awake タイプ ((4) c. The wise dog barked his master awake to warn him of the fire.) : 主動詞は本来は目的役割を持っていないが、意図的な状況において何らかの目的役割がオンラインで作りに上げられる。</p>
<p>(D) swim the swimsuit to tatters タイプ ((4) d. John swam the swimsuit to tatters.) : 主動詞の行為によって偶発的に生じる結果を表す。表現の範囲が限られ、許容度も低い。</p>
<p>(E) cry one's eyes out タイプ ((4) e. John cried his eyes out.) : 特定の動詞・目的語・結果述語の組み合わせに限られたイディオム。誇張表現と解釈されることが多い。</p>

この下位分類における許容度や生産性の違いについて、「(A) から (E) に下がっていくにつれて、許容度や生産性が限定されてくる。(影山 2005:96)」と述べており、誇張表現と解釈される (E) タイプのような結果構文は、最もプロトタイプから逸脱したタイプであるといえる。一方、派生的結果構文のプロトタイプである (A), (B), (C) では、動詞のクオリア構造における目的役割が関与している。影山 (2005) では、クオリア構造を構成する 4 つの役割 (形式、構成、目的、主体) が設けられた本来の趣旨を活かして、動詞のクオリア構造を次の (5) のように規定している。

(5) 動詞のクオリア構造

- a. 形式役割：その動詞が表す事象 (eventuality) のタイプ (activity, state, process, transition)
- b. 構成役割：その動詞の語彙概念構造 (LCS)
- c. 目的役割：その動詞が本来的に含意する動作の目的や恒常的機能
- d. 主体役割：その動詞表現が成立するための前提 (presupposition) やフレーム (場面や背景状況)

(影山 2005a: 83-84)

(A) ~ (C) タイプの派生的結果構文では、動詞の目的役割に、その事象における対象物の変化結果を含んでおり、動詞の表す行為は全て結果述語の表す変化を引き起こすことを目的としている。例えば、影山によると、(A) タイプにおける wipe という動詞は、「汚れを取り除く・その場所をきれいな状態にする」という特定の目的役割を持ち、「きれいな状態」という変化結果が結果述語 clean を選択することになる。一方、(D), (E) タイプの結果構文では、目的役割が関与しないため、状態変化を引き起こすことを目的として行為が行われるわけではなく、偶発的な結果を表している。さらに、(C) タイプに現れる bark ~ awake のような表現に関して、同じ動詞でも意図的な目的があるほうが偶発的な出来事より結果構文の容認度が高いと判断する英語話者がいるという事実が述べられている。

- (6) a. The wise dog barked his master awake to warn him of the fire.
b. *A stray dog in the distance barked the sleeping child awake.

(影山 2005b: 92)

したがって、bark ~ awake という表現をはじめとする (C) タイプの結果構文の VP はイデオム化していないことがわかるが、派生的結果構文の成立には、目的、意図性という概念が重要であることが示唆されている。さらに、(D), (E) タイプの結果構文については、クオリア構造で関与するのは主体役割のみということになり、その動詞表現が成立するための前提やフレームが重要な役割を持つと考えられる。また、誇張表現の解釈を持つ結果構文は (E) タイプに属すると思われるが、(1b) や (3) のような例文はこの下位分類では (D) タイプに分類される。構文の意味がどのように解釈されるかを見るためには、構文に表されている事象全体をどのように捉えるかという認知的な観点による分析が有効であると思われる。

2. 2. 有界性制約と機能不全の解釈

Suzuki(2006) では、Goldberg(1995) の洞察に基づき、派生的結果構文ⁱの結果述語に現れる形容詞を、身体機能の正常な状態からの否定的な方向への逸脱、つまり、機能不全状態を表すものとして、機能不全形容詞 (dysfunctional adjectives) と呼び、結果構文においてはデフォルトとしての正常な状態 (norm) から機能不全 (dysfunction) に至る次のような仮想スケールを共通の解釈の枠組みとして提案している。

- (7) norm dysfunction
0----- + > negative value
(/+/ はスケールの有界点を示す)

(鈴木 2007: 120)

また、機能不全形容詞を結果述語にとる結果構文のタイプとして、目的語に再帰代名詞や主語の身体部位表現が生じる擬似再帰形目的語 (fake reflexive object) 結果構文が特徴的であると指摘しており、次のような有界性制約を持つと主張している。

- (8) 有界性制約 (拡大版改定) :

結果構文における結果句は、相補対立スケールに基づいて解釈されなければいけない。

- (A) 選択性結果構文: 実質的な閉鎖スケール形容詞ⁱⁱを結果句とする。

ⁱ 鈴木 (2007) では、目的語が動詞によって意味的に選択されている場合を「選択性結果構文 (=コントロール結果構文)」、目的語が動詞の意味選択特性から逸脱している場合を「非選択性結果構文 (=ECM 結果構文)」と呼び、He tied his shoelaces tight. の例文に代表されるような状態変化動詞が用いられる結果構文を「見せかけの結果構文」と呼び、独立したカテゴリーとして分析している。本稿で扱う派生的結果構文は鈴木为非選択性結果構文と同様であるが、用語の混乱を避けるため「派生的結果構文」とした。「見せかけの結果構文」については Washio(1997) も参照された。

ⁱⁱ Wechsler(2001, 2005) は形容詞を「段階性形容詞 (gradable adjectives)」と「非段階性形容詞」に大別し、段階性形容詞のうち、デフォルトの成立基準を持つものを「閉鎖スケール形容詞」と呼び、

(B) 非選択性結果構文：

- (a) 非選択性目的語結果構文：実質的な閉鎖スケール形容詞／機能不全形容詞（および同等の解釈を持つ PP）を結果句とする。
- (b) 再帰形目的語（および身体部位）結果構文：機能不全形容詞（および同等の解釈を持つ PP）を結果句とする。

（鈴木 2007: 122）

再帰形目的語ではない結果構文にも機能不全という解釈は共通している。

- (9) a. She cried her handkerchief wet.
- b. The joggers ran the pavement thin.

（鈴木 2007: 121）

(9a) では、機能的観点から考えられるハンカチの正常な状態（dry）から wet という機能不全の状態へ、(9b) では、舗道の表面が劣化することで人が上を歩いたり走ったりするという本来の機能が損なわれるという点で機能不全状態への逸脱的变化が起こっていると解釈できる。さらに、これらの結果構文では、行為者の意図をはずれた逸脱的状况を描写するものが多ということも指摘されている。

また、正常な状態からの逸脱という点で、誇張表現もその延長線上にあると考えられる。つまり、行為者の意図をはずれた逸脱的状况をより誇張的に表現したものが、誇張表現の解釈を持つ結果構文であると予測できる。

しかし、目的語の選択に関してはどうだろう。(8) の制約が適用されるためには、何か機能が機能不全状態に変化しなければならず、それが目的語の位置に生じるが、それを特定するためには、前節でとり上げたクオリア構造の主体役割の関与やその他の動機付けが必要となる。また、前節で扱った派生的結果構文の下位分類タイプを見てみると、(D)、(E) タイプの結果構文には (8B-b) の制約が当てはまることにも注目したい。(4d) John swam the swimsuit to tatters. の目的語 the swimsuit は再帰形目的語でも身体部位でもないが、John が身につけているものという観点から John の身体部分の拡張であると考えられる。ここでもまた、派生的結果構文における事象の捉え方が重要であることが示唆される。つまり、派生的結果構文の表す事象は、正常な状態から機能不全状態への逸脱的变化を表しており、なおかつ、その変化を表す結果事象において変化の主体となるものは、行為者そのものではなく、行為者を表す再帰形目的語や身体部位、あるいは行為を表す動詞が持つ主体役割が形式的に選択されると解釈できる。

以上 2 節では、誇張表現の解釈を持つ結果構文が派生的結果構文の中で最も周辺の構文であるタイプであることを、動詞のクオリア構造による下位分類によって見た。また、それらの結果句には機能不全形容詞や同等の解釈を持つ PP が現れることも示された。次節では先行研究の問題点を述べた後、語用論的観点による分析の必要性を論じる。

成立基準の判断が常に文脈依存となる「開放スケール形容詞 (open-scale adjectives)」と区別している。

3. 先行研究の問題点

派生的結果構文を語彙意味論的に分析することによって、結果構文の成立には動詞の語彙情報が決定的に重要であり、結果句における有界性制約がその慣用化や生産性に関与していることが明らかになった。しかし、次の結果構文を比べてみると問題点が生じる。

- (10) a. The joggers ran the pavement thin. (= (1b))
- b. The joggers ran their Nikes threadbare. (= (3a))
- c. The joggers ran themselves tired. (= (3b))

これらの結果構文の表す意味は、「舗道が劣化した」り、「ナイキの靴がぼろぼろになった」り、「疲れ果てた」りするという状況というよりも、走者がただ単に走ったのではなく、「度を超えて走った」という状況を表している。つまり、ここでフォーカスされている事象は結果述語の表す事象ではないといえる。

また、動詞のクオリア構造から考察すると、(10a), (10b), (10c) は同じ構造を持つといえるが、(10a) だけが明らかに比喩的な誇張表現であり、実際に目的語の状態変化を表しているとはいえない。一方、(10b), (10c) は目的語の機能不全状態への変化が現実起こったという解釈が成り立つ。このことから、(10a) は (10b), (10c) の状況を誇張的に表現しているという予測もできる。しかし、(10b) には曖昧性もあり、実際に「ナイキの靴がぼろぼろになった」という字義的表現として解釈することも可能である。いずれにしても、(10) の3つの異なる文において「度を超えて走った」という共通解釈が生じるのはなぜだろうか。また、そのような状態を表すためにこれらのような異なる表現が生じるのはなぜだろうか。

以上のことから、同じ構造を持つ構文間の解釈の違いやその動機付けを考察するためには、語用論的分析が有効であると考え、次節でその分析と考察について論じる。

4. 誇張表現として解釈される結果構文における語用論的分析

4.1. 関連性理論の観点から

Sperber & Wilson(1995) は、「関連性の原理」(The Relevance Principle) が人間のコミュニケーションについての説明の基盤であると主張し、話し手と聞き手は関連性の原理に一致する解釈を求めようとする。関連性とは、次に示すように、文脈効果とそれに対する処理労力という2つの概念によって特徴づけられる。

- (11) a. Other things being equal, the greater the cognitive effect achieved by the processing of a given piece of information, the greater its relevance for the individual who processes it.
- b. Other things being equal, the greater the effort involved in the processing of a given piece of information, the smaller its relevance for the individual who processes it. (Sperber & Wilson 1991:544)

つまり、人間の認知プロセスは、常に最小限の処理労力を費やすことによって最大限の認知的効果をもたらすという目的を達成するように作用していると考えるのである。Sperber &

Wilson はメタファーについても関連性理論を用いて説明しており、大堀編 (2004) では次のように述べている。

- (12) メタファーは話し手自身の思考についての解釈を示した発話として特徴づけられる。思考についての解釈としての最適の表現は、処理する価値のある関連性の高い情報を聞き手に提供しなければならず、要求する処理労力はできるだけ少ないものでなければならない。文字通りの発話が、その情報処理のために費やす労力が得られる情報に見合わないほど多いようなものであれば、その文字通りの発話は関連性の高いものとは言えず、話し手は自分の思考を文字通りに解釈したものを発話することは避けて、比喩的な表現を選ぶことになる。

(大堀編 2004:154)

前章の (8) で述べたように、派生的結果構文における結果述語には機能不全形容詞や同様の解釈を持つ PP が選択される。このことから、ある行為が過度に行われると、その結果として、限度を超えて正常な状態から逸脱した状態に至ると解釈できる。例えば、“(10b) The joggers ran their Nikes threadbare.” の場合、ただ「度を超えて走った」だけではなく、「ナイキの靴が正常な状態から逸脱した状態になるほど走った」という意味を表しているといえる。それならば、“The joggers ran extremely hard.” のように表現した方が聞き手の処理労力は少なくすむと考えられるが、正常な状態から逸脱するような様子など、それ以上の様々な含意を伝えているのがこれらの結果構文であるといえる。

- (13) We might think of communication itself, as a matter of degree. When the communicator's informative intention involves making a particular assumption strongly manifest, then that assumption is *strongly communicated*. When the communicator's intention is to marginally increase the manifestness of a wide range of assumptions, then each of them is *weakly communicated*.

(Sperber & Wilson 1986:59-60)

このように、解釈において直接表現よりも労力がかかることは、一見関連性の原理に反するように思われるが、関連性の原理が前提にあると仮定すると、誇張表現のような文ではそのような処理労力以上の効果が期待されるといえる。

4.2. 疑似目的語の選択

例文 (10) において、それぞれの結果構文は (10a) the pavement thin, (10b) their Nikes threadbare, (10c) themselves tired という異なる結果事象で表されており、それぞれ下位範疇化されていない疑似目的語が選択されている。これらの疑似目的語が選択される動機づけは何であろうか。前節の関連性理論に基づいて考察すると、「走者が走る」という事象において関連性の高い情報が選ばれるということになる。また、疑似目的語には「走る」という行為や、動作主である「走者」とのメトニミー関係が成り立つと分析することもでき、メトニミーによるスキーマが機能することによって関連性の高い情報になり得るのではないかと

考える。Lakoff and Johnson(1980) はメトニミーのパターンを提案しており、その中には次のような関係が挙げられている。

(14) THE PART FOR THE WHOLE

(部分で全体を指す)

We don't hire *longhairs*.

The Giants need a *stronger arm* in right field.

(Lakoff and Johnson 1980: 38-39)

(14a) では *longhairs* で「長髪の人」、(14b) では a *stronger arm* で「強い腕の選手」を表している。このように、体の部分で人間全体を表すパターンはよくあるメトニミーであることはさまざまな研究で指摘されている。(10b) の例では、Nikes で「ナイキの靴を履いている走者」を表しているといえる。Kövecses and Radden (1998) は、メトニミーとしての選ばれやすさとして、次のような原則をあげている。

(15) 人間の経験に由来する選択性

human over non-human (人間の方が選択される)

concrete over abstract (具体的なものが選択される)

interactional over non-interactional (相互作用的なものが選択される)

functional over non-functional (機能性の高いものが選択される)

(16) 知覚的な選択性

immediate over non-immediate (直接的なものが選択される)

occurrent over non-occurrent (現在起きていることが選択される)

more over less (量の多いものが選択される)

dominant over less dominant (優勢なものが選択される)

good gestalt over poor gestalt (良いゲシュタルトを構成するものが選択される)

bounded over unbounded (境界のあるものが選択される)

specific over generic (特定性の高いものが総称的なものより選択される)

(谷口 2003:133)

(10a) the pavement thin が、「舗道が磨り減った」ことで過度に走ったという行為を指すメトニミーであると仮定すると、具体的な物質的変化であり (concrete>abstract)、走るという行為を行う舗道が直接的なものでもあり (immediate>non-immediate)、舗道が磨り減ることは過度に走ることよりも特定性が高い (specific>generic) と捉えられ、際立つものとして選択されると考えられる。(10b), (10c) についても同様の分析が成り立ち、過度に走ったという行為をより具体的、特定の、直接的に表しているものが選択されているといえる。

また、(9a) と (9b) の間には近接関係があるといえる。(10b) において「ナイキの靴がぼろぼろになる」、つまり「靴が磨り減る」、ということから、「走る」という共通のフレームにおいて、靴と舗道は接している関係にあり、「靴が磨り減る」という現象を靴と接する「舗道も磨り減る」と捉えることも可能であると考えられる。現実的に起こる可能性があるのは

「靴が磨り減る」ことであるが、実際の様子よりも大げさに表すのが誇張表現であるため、靴と隣接関係にある「舗道」が磨り減るという表現に転じたのではないだろうか。いずれにしても、靴と舗道には相互作用的な関係があるといえるためメトニミーとして選ばれる根拠となる。

また、動作主の行為と関連して、派生的結果構文の擬似目的語に関して次のように分類することができる（擬似目的語はイタリックで示してある）。

(17) 再帰代名詞タイプ

- a. Joe shouted *himself* hoarse.
- b. Sue ate *herself* sick.

(中右・西村 1998:190)

(18) 譲渡不可能な身体部分を表す名詞句タイプ

- a. Everyone would be tearing *their hair* out. (鈴木 2002:192)
- b. Why is she sobbing *her heart* out? (ibid.)

(19) 動詞の行為からメトニミー的に関連づけられる名詞句タイプ

- a. John drank *the pub* dry.
- b. Ralph tried to blink *the grisly vision* away. (鈴木 2002:192)

動作主と擬似目的語の関連性という観点から見てみると、(17)の再帰代名詞は変化した動作主自体を表し、(18)の譲渡不可能な身体部分は、再帰代名詞を人間全体と捉えると人間の一部分であるといえるため、「全体と部分」の関係であるといえる。また、(19)の動詞の行為からメトニミー的に関連づけられる名詞句は、2節で述べたように、その動詞の持つクオリア構造の主体役割や目的役割によってメトニミー的に関連づけることができる。例えば(19a)では、お酒を飲む(drank)という行為の主体役割として、お酒を飲む場所がパブであることから、パブ(the pub)というフレームを含んでいると捉えることができ、さらに、パブとお酒の間にはメトニミーが成立している。(19b)では、瞬きをする(blink)という行為の目的役割として、目蓋を閉じたり開いたりする動作によって目の前のものを見たり見なかったりすることが考えられる。また、主体役割として、目の前に何らかの光景が存在し、驚いたり信じられない感情を伴う場合に行うということも考えられる。また、(17)→(18)→(19)という順序で主語との関係がより直接的ではなくなっているため、その順序で拡張したと推測される。拡張しても動作主との関連性を求めようとするため、その関連性にはメトニミーが成立するため、下位範疇化されていない疑似目的語でも容認されると考えられる。

これらの構文解釈に共通する点は、過度に行為が行われた結果としての新しい事象を知覚し、その行為が行われた程度を結果事象として表していることである。結果事象を表す際に、何をプロファイルして表すかということによって擬似目的語と結果述語が選択されると思われる。Langacker(1995)は、メトニミーのようにプロファイルと指示対象がずれている現象を「プロファイルと活性領域(active zone)の不一致」ⁱⁱⁱと呼び、こうした現象が起きる理

ⁱⁱⁱ 例えば the arrow in the tree (木に刺さった矢)において、実際に木に刺さっているのは the arrow のプロファイルである「矢」全体ではなく、「矢の先」だけであり、実際に指示される活性領域は「矢の先」となる(谷口 2003:130)。

由について、「際立ちの高いものについて思考し、明示的に言語化する」という認知上の傾向との折り合いをうまくつけられるためであると述べている(谷口 2003:130-131)。擬似目的語と結果述語の選択にもこのような思考体系が関与していると考えられる。

5. 結論

本論では、派生的結果構文の中でも誇張表現の解釈を持つ結果構文をはじめとする周辺の結果構文の意味拡張と解釈について、語彙意味論による先行研究を踏まえ、認知意味論と語用論による分析を試みた。

関連性理論の観点から考えると、結果構文という形式で伝達するということは結果事象に焦点が当たるとも意味するといえる。例えば、「走者が度をを超えて走った」という状況を、“The joggers ran extremely hard.”のように伝達する以上に、「どの程度度をを超えて」走ったのかという結果事象に焦点が当たると含意できる。これは、本来の結果構文が「動作主がある動作を行った結果、目的語がある結果状態になった。」と解釈される構文であり、そこから派生した派生的結果構文もそのような解釈ができると推論されると考えるからである。さらに、下位範疇化されていない疑似目的語をとることは、そうでない場合よりも構文中における目的語の関連について解釈しようとする処理労力を要する。関連性理論の観点から考察すると、その労力によって様々な文脈効果が生じるのである。

また、誇張表現と呼ばれる結果構文における結果事象とは、いわゆる「擬似目的語+結果述語」が字義通り表す結果事象ではなく、「擬似目的語+結果述語」がメトニミーとして表す動作主の過度の行為の程度であり、正常な状態から逸脱していることを表していると論じた。これによって、結果述語の持つ機能不全の解釈の動機付け、字義どおりの解釈を持つ結果構文から誇張表現の解釈を持つ結果構文への意味拡張にメトニミーが関与していることを提案した。

本論で取り上げた誇張表現の解釈を持つ派生的結果構文では、結果事象として表される事象は、動作主の行った事象の程度を表すものであると分析した。それゆえ結果事象が一種のメタファーとして解釈されたり、曖昧性が生じたりする。しかしながら、認知意味論的な観点から考えると、結果構文自体は結果事象がフォーカスされる構文であり、誇張表現と呼ばれる結果構文の場合には、結果事象は程度を例える役割を果たし、現実の出来事ではない事象に焦点が当たっていることになる。これらの結果構文の解釈において、発話が字義通りかどうかということの問題にしない関連性理論の観点から考察することによって、周辺の結果構文の解釈に関して一貫した説明を試みた。下位範疇化されていない目的語をとることが可能になるのも、抽象的に程度を表すよりも、具体的なメタファーによって伝達し、それによって処理労力を軽減すると共に文脈効果を期待するという動機づけによると思われる。また、最適な関連性という点を考慮すると、生産性が限られることも何らかの関係があると考えられるが今後の課題としたい。

【参考文献】

- Carrier, J. and J. H. Randall 1992. “The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives.” *Linguistic Inquiry* 23, 173-234
- Goldberg, Adele 1995. *Constructions*. University of Chicago Press

- 影山 太郎 2005a. 「辞書的知識と語用論的知識—語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて」影山太郎編『レキシコンフォーラム No.1』 pp.65-101. ひつじ書房
- 影山 太郎 2005b. 「結果構文・結果複合動詞の産出と解釈」大石強・西村哲雄・豊島庸二編. 『現代形態論の潮流』 pp.115-134. くろしお出版
- Kövecses, Zoltán and Günter Radden 1998. “Metonymy: Developing a Cognitive Linguistic View,” *Cognitive Linguistics* 9:1, 37-77.
- Lakoff, George and Mark Johnson 1980. *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1995. Raising and Transparency,” *Language* 71, 1-62.
- 中右実・西村義樹 1998. 『構文と事象構造』 研究社
- Napoli, Donna J. 1992. “Secondary Resultative Predicates in Italian.” *Journal of Linguistics* 28, 53-90
- 小野尚之(編) 2007. 『結果構文の新視点』(ひつじ研究叢書〈言語編〉第62巻) ひつじ書房
- 大堀壽夫(編) 2004. 『認知コミュニケーション論』(シリーズ認知言語学入門 第6巻) 大修館書店
- Pustejovsky, James 1995. *The generative lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Sperber, Dan, and Deirdre Wilson. 1986. *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.
- Sperber, Dan, and Deirdre Wilson. 1991. “LooseTalk.” In S. Davis eds., *Pragmatics*. 540-590. Oxford University Press.
- 鈴木 亨 2002. 「英語における半支持的述語—Some Predicates Fake Their Way into Object Positions」, 山形大学紀要(人文科学) 第15巻第1号, 179(130)-196(113)
- 鈴木 亨 2007. 「結果構文における有界性制約を再考する」小野尚之編『結果構文研究の新視点』 pp.103-141. ひつじ書房
- Suzuki, Toru 2006. “Between Conventionality and Compositionality: The Resultative Construction Deconstructed?” *English Linguistics* Vol.23, No.1: pp.213-244.
- 谷口 一美 2003. 『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』 研究社
- 對馬 康博 2007. 『主題非明示型結果構文の構文的環境とそのカテゴリー形成』 「日本認知言語学会論文集」 Vol.7, pp.277-287
- Washio, Ryuichi 1997. “Resultatives Compositionality and Language Variation.” *Journal of East Asian Linguistics* Vol.6, No.1: pp1-49.
- Wechsler, Stephan 2001. “An Analysis of English Resultatives under the Event-argument Homomorphism Model of Telicity.” *Proceedings of the 3rd Workshop on Text Structure, University of Texas, Austin, October 13-15, 2000*.
- Wechsler, Stephan 2005. “Resultatives under the ‘Event-Argument Homomorphism’ Model of Telicity.” *The Syntax of Aspect: Deriving Thematic and Aspectual Interpretation*, ed. by Nomi Erteschik-Shir and Tova Rapoport, pp.255-273. Oxford University Press.

